ヴェネツィア方言における無主語接語文*

Frasi senza clitici soggettivi nel veneziano

荻原　寛

Yutaka OGIWARA

0．はじめに

ヴェネト諸方言は Venezia を中心に Chioggia、Pallestrina、Mestre などの潟部ないしは潟沿岸部で行なわれている Veneziano lagunare、内陸部の Padova や Vicenza などで行なわれている Veneto centrale、Treviso や Belluno などで行なわれている Veneto settentrionale、Verona を中心に行なわれている Veneto occidentale、そして Trieste や Grado などアドリア海沿岸部の Veneto Giuliano の五つに大別されるが、[1] これらの方言に共通して見られる特徴の一つに、主語に付随ないしは主語の代替として生起する主語接語の存在がある。本稿では、逆にヴェネツィア方言ではいかなる条件のもとでこの主語接語の生起しない文が形成されるか、また主語接語のシステムとしての利点はどこにあるのかを、Veneto centrale に属しはするが距離的にも近く、先達の研究成果の蓄積も厚いパドヴァ方言の例を参照しつつ分析して行きたい。

1．ヴェネツィア方言の文法的特徴の概略

1．1．音声・音韻的特徴

Lepschy (1978)、Zamboni (1979)、Canepari (1979)、Schmid (1998)らは共時的な視点から、Rohlfs (1949)、Devoto e Giacomelli(1971)、Zolli (1979)、Pellegrini (1979)、Tagliavini (1982)、Marcato (1984)らは通時的な視点から、ヴェネト諸方言の音声・音韻的特徴について分析しているが、特に前者の分析結果から直接 Veneziano lagunare に関わる部分に絞って簡略にまとめてみる。

ヴェネツィア方言の母音はイタリア語と同じく /i, e, ɛ, a, ɔ, o, u/ の 7 母音であるが、子音は/p, b, t, d, k, g, tʃ, dʒ, m, n, ɲ, f, v, s, z, ts, dz , r, l/ の 19 子音である。イタリア語との対応関係で見ると、語源の母音間閉鎖音は nuotar／nuar、sapone／saon のように多くの場合は無音化しているか、amico／amigo、catena／ca(d)ena のように有声音化している。また、sotto／soto のように二重子音が欠如(scempiamento)しているが、[2]ことに/l/は語源的に単子音であっても二重子音であっても子音衰微（lenizione）の対象となり、calle／cae、gondola／gondoa の例に見るように、母音間あるいは語頭に生起すると［e̯］またはゼロになる傾向が見られる。[3]語源での/k, g/と/e, i/の結びつきは、/tʃ, dʒ/、/ts, dz /を経て cento［seŋ to］、gente／zente[dzeŋ te]のように/s, dz/となった。語尾音消失に関しては他のヴェネト方言ほどの度合いではない。/n, l, r/ + /e/の/n, l, r/が so(l)ene のように語源的に二重子音である場合を除いて、

canal に見られるように/e/が消失するのと、/n/＋/o/の/n/が ano のように語源的に二重子音である場合を除いて、man に見られるように/o/が消失する程度である。すでに例示したが、/m,/と/n/は音節末ないし語尾で中和して、conprar のように［ŋ］となる。[4)]

1．2．形態・統語的特徴

ヴェネト諸方言に関する言語学的また文献学的な研究は、1979 年から 93 年にかけてパドヴァ大学から出版された Manlio Cortelazzo 編の論文集、*Guida ai Dialetti Veneti* 全 15 巻に多くを見ることができるが、ヴェネト諸方言を一手に扱った文法書は Silvano Belloni (1991)の *Grammatica Veneta* をおいて他にない。この単元ではこの *Grammatica Veneta* を中心に、Benincà e Vanelli (1982)や Lepschy (1978, 1983, 1984)らの研究成果を織り交ぜて、ヴェネツィア方言の形態・統語的特徴を簡略にまとめてみる。

動詞の活用形は、i)単純時制における３人称単数と複数、ii) 半過去における２人称および３人称の単数と複数、iii)未来形における２人称単数と３人称単数・複数、iv)接続法現在と接続法過去における１人称単数と３人称単数・複数、v)条件法における１人称単数と２人称単数・複数および３人称単数・複数、vi)essar と aver の直説法現在における２人称単数および３人称単数・複数のそれぞれにおいて屈折語尾の融合(sincretismo)[5)] が見られ、形態上の対立を成さない。

時制に関しては現代では遠過去をほとんど用いず、もっぱら複合時制である近過去を用いた表現が行なわれている。助動詞 essar と aver は(1)に示したように、essar では直説法現在の２人称単数と３人称単数・複数で/dz/、半過去のすべての人称・数で/dʒ/、aver では単純時制のすべてにわたって/g/を伴うという形態上の特性を持つ。

(1)

	ESSAR		AVER	
PRESENTE	sò(n)	semo	go	gavemo
	ze	se	ga	gavé
	ze	ze	ga	ga
IMPERFETTO.	gero	gerimo	gavevo	gavevimo
	geri	geri	gavevi	gavevi
	gera	gera	gaveva	gaveva

ただし、イタリア語と違って、複合時制において dover, poder, voler などの準動詞(verbi servili)を伴う場合は、その動詞が複合時制を essar で形成するか aver で形成するかを問わず、(2)のように常に助動詞 aver が用いられる。また再帰動詞および代名動詞の複合時制においては、再帰用法と受動態では(3)のように aver も用いるが、無人称用法では aver 以外は用いない。

(2) No go possuo vegnir. (it. *Non sono potuto venire*.)

(3) El se ga inbilà come na bissa. (it. *Si è arrabiato come una serpe*.)

イタリア語の副詞 ci に相当する ghe は場所の副詞であるだけでなく、ci が１人称複数の直接・間

接目的格代名詞であるように、３人称単数・複数の間接目的格代名詞でもある。

代名動詞による無人称表現において、イタリア語では si を ci に置きかえるが、ヴェネツィア方言では si に相当する se が(4)のようにそのまま代名動詞の接辞 se と並び、この用法の近過去においても過去分詞が男性複数形になることはない。さらに、イタリア語では、再帰動詞の場合の si は目的格代名詞に先行し代名動詞の場合は後置されるが、ヴェネツィア方言ではスペイン語と同じく(5)のようにいずれの場合も目的格代名詞に先行する。本稿のテーマである主語接語については、章を改めて説明する。

(4) Se se ga lavà.. (it. *Ci si è lavati.*)

(5) El se lo tol. (it.*Se lo prende./ Lo si prende.*)

２．主語接語について

主語接語(clitico soggettivo)とは、主語である名詞や代名詞と照応関係を持ち、ある時は主語と共起し、ある時は主語の代理をする接語を指す[6]。ヴェネツィア方言をはじめイタリア北部方言に共通する統語特徴であり、主語が頻繁に現れる点だけに限って言えば、類型論的にはイタリア語やスペイン語よりもフランス語や英語に近いとされるが、(6)のように固有名詞とも共起しうるのは主語接語だけに見られる特性である。[7]その意味的機能は主語名詞または主格代名詞と主語接語との共起にあり、Zamboni (ibid.:26)によればイタリア語における主語の現出と同様、強調のニュアンスを与えるものである。

(6) Carlo el ride sempre.

本稿では紙幅の関係上扱わないが、疑問文では主語名詞または主格代名詞と主語接語が倒置されてこれらの動詞と一体化する。この時、essar または aver のように活用形が単音節になる場合に、いくつか音韻変化が見られる。たとえば、essar の１人称単数の so と主格代名詞 io が融合するときに、/dʒ/が挿入されて sogio[8]となる。また、aver の２人称単数では主語接語に te ではなく tu または to が用いられ、さらに ga には/s/[9]が付加されて gas となってから一体化し gastu、gasto となる。[10]ただし、(7)の例に見られるように、ヴェネツィア方言では他のヴェネト諸方言と異なりこの倒置は義務的ではない。

(7) Gasto(Gheto) visto to zio? / Ti ga visto to zio? (it. *Hai visto tuo zio?*)

ヴェネツィア方言の主語接語の形態と統語的特性について従来の研究で明らかにされているのは次の点である。[11]それらをヴェネツィア方言の特性(CV:caratteristiche veneziane)としてまとめると(8)のようになる。(9)はヴェネツィア方言の主語接語と主格代名詞を一覧表にしたものである。

(8) CV-i) １人称単数・複数と２人称複数には主語接語がない。

ii) 2人称単数の主語接語は主格代名詞と同形である。

iii) 2人称単数の主語接語は主語の有無に拘わらず常に生起しなければならない。

iv) 3人称の主語接語は主語が現出していれば省略してもよい。

v)再帰動詞の再帰用法では主語接語を伴うが、無人称用法では伴わない。

(9)

	PRONOMI SOGGETTIVI	CLITICI SOGGETTIVI
1ª s.	mi	/
2ª s.	ti	ti
3ª.s. m.	lu, elo, eo	el, 'l, l'
f.	ela, ea	la
1ª.pl. m.	noialtri, nu	/
f.	noialtre, nu	/
2ª.pl. m	voialtri	/
f.	voialtre	/
3ª.pl. m.	lori	i
f.	lore	le

次に、パドヴァ方言の主語接語に見られる形態・統語上の特性(CP:caratteristiche padovane)を Benincà e Vanelli (ibid.)と Belloni (ibid.)の研究成果を基にまとめると(10)のようになる。(8)と重複するものは＝で示した。

(10) CP-i) ＝CV-i)

ii) ＝CV-iii)

iii) ＝CV-iv)

iv) 同じ主語からなる等位構文でも主語接語は必ず繰り返されなければならない。

v) 主語と動詞の間にイントネーションの切れ目などがあれば、主語接語を必ず伴う。

vi) 主語の名詞が動詞に後置されると主語接語を伴わない。

vii) aver による複合時制で目的格代名詞が共起する場合は、主語の名詞が動詞に後置されていても主語接語を必ず伴う。

viii) ＝CV-v)

ix) 天候を表す動詞や Bisogna (Pare、Ocore) che のように節を主語とする動詞の無人称用法は主語接語を伴わない。

すなわち、本稿のテーマである無主語接語文は CV-i)、CV-iv)、CV-v)、CP-vi)、CP-ix)の条件のいずれかを満たしている場合となる。次章では、ヴェネツィア方言で書かれた資料と照らし合わせながら、CP-vi)と CP-ix)がヴェネツィア方言にも共通する特性なのか、また、これら以外の条件で無主語接語文となる可能性を検証し、なぜ主語接語が必要なのかも明らかにして行く。

3．資料の分析と結果

3．1．資料について

資料としたのは Giuseppe Nalin 著 *Fiabe veneziane* である。[12] 現在これには Corbo e Fiore Editori 社版と Libreria Filippi Editrice Editori 社版との二つの版があり、前者には Daniela Zamburlin によるイタリア語訳がついている。そこで前者を選び、誤植と思われる個所を後者によって訂正することにした。ただし、このイタリア語訳は逐語訳というよりもむしろ翻訳の色彩が濃い点を予めご諒解戴きたい。ここで使われているヴェネツィア方言は前世紀半ばのものであるが、統語的特性の根幹に関わる部分では大きな齟齬はないと思われる。書かれた方言で最大の問題は正字法上の不統一であり、ヴェネツィア方言も例外ではない。[13] Nalin は/dz/音を z で、/z/音を s で、/s/音を ss で表している。二重子音は存在しないが教養語であったトスカーナ語の影響で、綴りの上は二重子音の形態をとっている。また、che は/ke/であるが chia は/ʧa/であり、cio は/ʧo/であるが ce、ci はそれぞれ/se/と/si/を表している。

3．2．資料に見る無主語接語文の条件

3．2．1．従来の基準による事例

前章の CV-i)すなわち１人称単数・複数と２人称複数の例としては(11)と(12)が挙げられる。これらはもともと主語接語としての語彙項目を欠いているのできわめて当然である。(13)は主格代名詞が現出している例で強調を表している。

(11) Oh! un'altra cossa, t'ò da dir. (it.*Oh! Un'altra cosa devo dirti.*, p.12)

(12) come se no ghe fussimo al mondo. (it.*come se non esistessimo.*, p.42)

(13) Mi no ghe ne vogio saver, e più che penso, e manco trovo da rimediarghe; farò una cossa mi, za che me sento fame, magnarò la galina rosta.
(it. *Non ne voglio più sapere. Più ci penso e meno trovo soluzione per rimediare a ciò che ho fatto. Una cosa farò invece, già che ho fame: mangerò la gallina arrosta..*, p.14)

CV-iv)すなわち３人称における主語との共起関係では、主語接語が生起するか否かはまったく任意的であることが分かる。(14)では等位構文にもかかわらず主語接語がない。このヴェネツィア方言の例はその点では CP-iv)の条件に反していることになる。

(14) La fada ghe consegna una bela nosa, e ghe dise: tolé, fia mia, sta nosa.
(it.*La fata le consegno anche una bella noce e le disse:"Prendete queste noce, figlia mia..",* p.4)

CV-v)すなわち再帰動詞の再帰用法では主語接語を伴うが無人称用法では伴わない例は(15)に見られる。se distingueva は無人称用法であるが、se somegiava は再帰用法なので主語接語 i を伴っている。

se chiamava も再帰用法であるが主語接語を伴っていない理由については後で述べる。

(15) I dise che ghe gera una volta un mercante assae rico, de nome Tognoto, e che gaveva do fioli maschi, uno se chiamava Minzo e uno Zinzo, e tanto i se somegiava in tela fisonomia, che dificilmente se distingueva uno da l'altro.
(it. *C'era una volta un mercante molto ricco che si chiamava Tognoto. Aveva due figli maschi:uno si chiamava Minzo e uno Zinzo e si assomigliavano tanto che era difficile distinguerli l'uno dall'altro.*, p.88)

次にパドヴァ方言での条件がヴェネツィア方言にも当てはまるかであるが、CP-vi)すなわち主語となる名詞が動詞より後に生起すると主語接辞を伴わないのは(16)や(17)の例から明らかである。

(16) Stava là sconta a cufolon una mora. (it. *Là nascosta era accovacciata una donna nera.*,p.6)

(17) In sta maniera ze passai i do zorni che el prencipe doveva restar fora de casa.
(it. *Così passarono i due giorni che il principe doveva trascorrere lontano da casa.*, p.44)

CP-ix)すなわち天候を表す動詞や節を主語とする動詞の無人称表現が主語接辞を伴なわない点については、ヴェネツィア方言にも同じことが言えるのは(18)と(19)の例が示しているが、(20)の例からこれらの動詞が無人称として用いられないと主語接語を伴うことがわかる。

(18) Bisogna che la sapia, mia signora, che ze necessario, che questo suceda in tempo de tre zorni .
(it. *Dovete sapere, mia signora, che bisogna che ciò accada entro tre giorni.*, p.4)

(19) Intanto ela in scondon la va de suso, e dal balcon la buta a basso per circa do lire de fighi sechi, e de ua passa, e la trà sta roba cussì spessa, che pareva giusto che la cascasse come la piova; quel imbecil de Vardelo credendo proprio che piovesse, el se mete a chiamar so mare.
(it. *Mentre lei, di nascosto, andò di sopra e buttò giù dalla finestra circa due lire di fichi secchi e di uva passa. Ne buttò tanti che sembrava proprio che piovessero.Quello scimunio di Guardàtelo credendo proprio che piovessero si mise a chiamare sua madre.*, p.20)

(20) co do ochieti che i pareva vivi
(it.*con due occhietti che sembravano veri*, p.38)

3．2．2．従来指摘されなかった事例

資料には前述の条件以外でも無主語接語文が成り立つ例がいくつか含まれている。関係代名詞が関係節内の主語である場合は無主語接語文となる例が多いが、これは義務的ではないので必ず無主語接語文となる場合に限って述べる。ひとつは、CP-ix)をさらに敷衍したもので、(21)に見るように天候に限らず自然現象に関わる表現には主語接語が伴わない例である。また、(22)のように統語上節を主語とするよりも、むしろ分裂文 cleft sentence としての essar と副詞からなる叙述部には主語が語彙として存在しないという前提があっての主語接語の不在の例もあり、この二つはばらばらに成立する条件と言うよりも、むしろ CV-v)の再帰動詞に対する条件とあわせて、無人称用法には主語接語が用

いられないという単純な条件になる。

(21) Questa la ze stada là sin verso zorno, e quando che ga scomenzà a far chiaro, sta fada ze scampada via.
(it. *Questa rimane là fino all'alba e quando cominciò a rischiarare scappò via.*, p.40)

(22) Te prego a star sempre in la pignata de la mazzorana, e de no vegnir fora de là sin che no torno, che sarà presto.
(it. *Ti prego di rimanere sempre dentro il vaso di maggiorana e di non uscire da lì fin che non torno, e sarà presto.*, pp.40-42)

もう一つは(23)と(24)の例が示すように主語が不定代名詞の場合に無主語接語文が成立する。前出の(15)の用例中の uno もこの例に該当するため、再帰用法の se chiamava の主語となっていても主語接語を伴っていないのである。このことと先ほど述べた無人称用法には通底するものがある。名詞は具体的な内容であれ抽象的な内容であれ心象は明確であり指呼性は強い。それに比べて不定代名詞は言及の対象への指呼性は弱く曖昧である。(15)の用例中の uno にしても二人の兄弟のうちのどちらか一人を指呼しているのであって、どちらかを最初から特定して指す機能はない。固有名詞の現出と２から１を引くという引き算で結果的に特定されているのである。すなわち、主語接語は後述するように照応関係の足がかりとしての機能を有しているが、最終的には明確な指呼が行なえる対象にしか用いられないということになる。

(23) Molti vegniva da lontan-lontan per tentar la so fortuna.
. (it. *Per tentare la fortuna molti venivano da lontano.*, p.48)

(24) El ghe mete la coroa in testa, po el comanda che tuti la gabia da inchinar profondamente, disendoghe eco la vostra regina.
(it.*Le mise la corona in testa e poi dicendo: "Ecco la vostra regina" ordinò che tutti dovessero profondamente riverirla.*, p.86)

３．３．主語接語と照応関係

前節で、主語接語は最終的には明確な指呼が行なえる対象にしか用いられないと述べたが、それでは主格人称代名詞との関係ではどうなのか、主語接語を持たない１人称単数・複数および２人称複数は明確な指呼を行っていないのかという疑問が呈されると思うが、主語接語にはさらに重要な機能があり、それに従って生起しているのである。それは１．２．で触れた、融合 sincretismo により言及の対象が拡散するのを防ぐという照応の機能である。たとえば、(25)では i tosati が fa と casacasse の主語であることが主語接語 i により明確に示されている。この i があることで先行の主語 Lu とこれらの動詞の関係が断ち切られることになる。(26)では主語接語 i は関係代名詞 chi に照応しており、それにより初めて chi が複数の人間を言及の対象にしていることが分かるのである。(27)の例では異なる２つの名詞 il re と i nobili および指示代名詞 questi が主語として現出しているが、生起の順にそれぞれが l' 、el、 i と照応関係を結び混乱が起きることはない。

(25) Lu l'è corso subito in orto, e l'à scomenzà a far dei busi in tera co l'idea che i tosati correndose drio, come che i fa per solito, i ghe cascasse drento.
(it. *Corse subito nell'orto e cominciò a scavare dei buchi per terrra affinche i ragazzini, rincorrendosi come fanno di solito, ci cascassero dentro.*, p12)

(26) Varda ben de no far contrato co chi chiachera molto, perché i te ingana sicuro.
(it. *Stai ben attento a non venderla a chi chiacchiera troppo perché sicuramente è uno che ti imbroglia.*, pp.16-18)

(27) Al re ga piasso sto consegio, e l'à invidà a disnar tuti i nobili, e quando che i ga terminà de magnar el l'à fati meter in fila, ordinando, che un per un i ghe passasse davanti ai do putei per veder se questi o a uno o a l'altro i gavesse fato ciera
(it. *Questo suggerimento piacque al re e perciò invitò a pranzo tutti i nobili. Quando finirono di mangiare li fece mettere in fila e ordinò che uno alla volta passassero davanti ai bambini per vedere se questi ne riconoscessero qualcuno.*, p.28)

指呼機能に限って言えば１人称と２人称で表される対象が認識上もっとも明確であるのにもかかわらず、１人称単数・複数と２人称複数に主語接語がなく、一方、２人称単数は常にその主語接語を伴わなければならないという不均衡は、一に融合 sincretismo による混乱を回避するという統語面での処理を優先させた結果に他ならない。すなわち、無主語接語文が成立するには融合による言及の混乱が生じない環境であることが第一条件となる。主語接語による照応関係を結ばないために混乱の生じるおそれがある場合は、主語としての名詞や主格人称代名詞が生起する。そして、まさにこの点においてヴェネツィア方言あるいはおそらく他のヴェネト方言も問題を抱え込むことになる。無人称用法では、ある構成素を統語上の機能から主語として指し示せたとしても、具体的な語彙としての主語がないからである。換言すれば、性数一致を基盤とする主語接語が照応関係を結ぶべき言及対象が存在しないということである。融合による混乱を免れているのは動詞の意味によるところが大きく、それすら危うい場合には統語上の処理に差異をつけることで回避するしかない。本稿で CV-v)としてまとめた、再帰用法では主語接語を伴うが、無人称用法では伴わないという処理がそれである。つまり、ヴェネツィア方言にとって無主語接語文とは、１人称単数・複数と２人称複数の場合を除いて、止むを得ざる形態であると言えよう。

４．結び

文脈で言及の対象が判断できる場合は主語の省略が可能なイタリア語やスペイン語から見ると、主語接辞を伴う構文は一見煩雑に見えるが、その主たる要因は動詞屈折語尾の融合の多さにあることが改めて認識された。同様の環境に対して英語やフランス語ではあらゆる場合に主語を生起させることで処理しており、この点に限って言えばヴェネツィア方言は類型論的にイタリア語とフランス語の中間に位置付けられるであろう。

本稿では、ヴェネツィア方言の特性の一つを隣接するパドヴァ方言と比較してきたが、従来指摘されている[14]パドヴァ方言にあってヴェネツィア方言にない接語 a の存在や、２．で触れた疑問文形成上の違い、ならびに音韻や語彙の相違、あるいは等位構文でも主語接語をとらないといった点を除けば、主語接語が生起する条件に関して両方言の間に大きな差がないことが確認された。また、不定代名詞が主語接語をとらないということも新たに分かった。最後に、ヴェネツィア方言における無主語接語文を成り立たせる条件を以下にまとめる。

①主語が１人称単数か複数である。

②主語が２人称複数である。

③主語が不定代名詞である。

④動詞が無人称用法である。（自然現象表現を含む）

⑤動詞の後方に名詞としての主語ないし主格人称代名詞が生起する。

1995 年に政府中央統計局 Istituto Centrale di Statistica がイタリア全土で行なった言語調査によると、家庭の中では国民の 44,6%がイタリア語だけあるいはイタリア語を優先的に使用し、23,6%が土地の方言や言語を好んで用い、28.,8%はイタリア語と土地の方言や言語を交互に使っており、Veneto 州では住民の半数以上に当たる 52,7%が家の中では方言を使っていることが判明した。[15]この高い数値から郷土への愛着、特に千年続いたヴェネツィア共和国別称 La Serenissima への格別な愛着と矜持が想像されるが、日本ではヴェネツィアの歴史や街などが広く紹介される割にはそこで日常使われている言語に光が当てられることがない。本稿がそうしたヴェネツィア方言研究への拙いながらも第 1 歩となればまさに欣快の至りである。

註

* 本稿は第 37 回日本ロマンス語学会大会（1999 年 5 月於愛知県立大学）にて「ヴェネツィア方言において無主語接辞文は可能か」の題名で行なった口頭発表の内容を訂正し加筆したものである。題名も接辞をより適切な接語に変えて簡潔にした。席上、貴重なご意見を賜った先生方に心より感謝申し上げます。

* 本稿はまた 1996 年度文部省公立大学在外研究助成により l'Università Ca' Foscari di Venezia で行なった研究の成果の一部である。

1） Tagliavini (1982: 401)は Zamboni (1979: 19)による四大別に Venezia Giulia を加えたが、さらに国外では旧ヴェネツィア共和国領のアドリア海沿岸部の Istria でも行なわれており、Cortelazzo (1981: 195-205)や De Mauro e Lodi (1993: 17-29)が言語地図を作成したときにこの地方も対象に含んでいる。

2)イタリア語では二重子音になるこの子音の直前の母音は、強勢がかかるので音価がやや長く、イタリア語と対比すると短母音が長母音になったような印象を与える。

3)Cortelazzo (ibid:190)によると、ヴェネツィアではある時代まで/l/と/ll/を区別していた可能性がある。

4)conprar のように正字法に反映される場合もあるが、ヴェネツィア方言にとって代表的語彙でありながら campo「広場」のように綴りがイタリア語と変わらない場合もある。

5)Iordan y Manoliu (1972)は人称に関わる sincretismo はラテン語の時代には全く見られなかったが、ロマンス語になってからいかに増えたかをフランス語を引き合いに出して説明しているが、ヴェネト諸方言に見られる sincretismo の多さはフランス語に優に匹敵するであろう。

6)Benincà e Vanelli (ibid.)も Belloni (ibid.)も接語代名詞 pronome clitico として、いわゆる主格、直接目的格、間接目的格

の代名詞と同じパラダイムで扱っている。強勢か無強勢かまたは前接か後接かを基準として分類することはそれなりに理に適っているが、この接語の統語機能と性格を浮き立たせるには範疇を独立させた方がよいと思われるので、あえて主語接語という範疇を立てた。

7) Benincà e Vanelli (ibid.:16) Belloni (ibid.:114)を参照されたい。

8) Zamboni (ibid.:28)と Belloni (ibid.:153)による。しかし、自身が母語話者である Giulio C.Lepschy (1978:176)と筆者が 1996 年から 97 年にかけて現地滞在中に行なった調査によれば、sogio よりも soio のほうがよく使われているようである。Rohlfs(1949:257)は Carlo Goldoni (1707-93)の戯曲に見る例として songio を挙げているので、おそらく songio> sogio> soio という歴史的な形態上の変化があったものと考えられる。

9) Rohlfs (ibid.:247)はラテン語の２人称単数の語尾-s が保存された形であると指摘している。

10)今日ではこの形は古いとみなされており、gato あるいは gheto が用いられている。

11) Lepschy (1978; 1984) および Belloni (ibid.) を参照されたい。

12) Libreria Filippi Editrice 版の Tiziano Rizzo の解説によると、収益金を慈善事業の基金に回す目的で 1851 年から 53 年にかけてヴェネツィアで毎年発行された *Almanacchi dei poveri* に掲載されたものが原典である。Giuseppe Nalin はその監修者であり、果たしてこれらの民話の著者が彼自身であったかは不明であるとしているが、一方の Corbo e Fiore Editori 版のイタリア語訳者 Daniela Zamburlin は著者が Giuseppe Nalin であるのは自明のこととして解説している。

13) Canepari (ibid.)および Marcato (ibid.) を参照されたい。

14) Venincà e Vanelli (ibid.:p.31)

15) *Il Gazzettino* 1997 年 1 月 10 日付け記事より。

参考文献

Belloni, Silvano. *Grammatica veneta*, Editrice La Galiverna e Libreria Editrice Zielo, Padova, 1991.

Benincà, Paola e Vanelli, Laura. "Appunti di sintassi veneta", nel Cortelazzo, M.(ed.), *Guida ai dialetti veneti*, vol.4, Cooperativa Libreria Editrice degli Studi dell'Università di Padova, Padova, 1982.

Boerio, Giuseppe. *Dizionario del dialetto veneziano*, Premiata Tipografia di Giovanni Cecchini Edit, Venezia, 1856; Giunti Firenze, 1993.

Canepari, Luciano. "I suoni dialettali e il problema della loro trascrizzione", nel Cortelazzo, M.(ed.), *Guida ai dialetti veneti*, vol.1, Cooperativa Libreria Editrice degli Studi dell'Università di Padova, Padova, 1979.

Cortelazzo, Manlio. "Interpretazione di carte linguistiche", nel Cortelazzo, M.(ed.), *Guida ai dialetti veneti*, vol.3, Cooperativa Libreria Editrice degli Studi dell'Università di Padova, Padova, 1981.

De Mauro e Lodi, Mario. *Lingua e dialetti*, Riuniti, Roma, 1993.

Devoto, Giacomo. *Il linguaggio d'Italia*, Rizzoli, Milano, 1974.; BUR, 1977.

Devoto, Giacomo e Giacomelli, Gabriela. *I dialetti delle regioni d'Italia*, RCS Sansoni, Firenze, 1971, 1991; Bompiani, Milano, 1994.

Iordan, Iorga y Manoliu, María. *Manual de lingüística románica*, Gredos, Madrid, 1972, 1980.

Lepschy, Giulio. *Saggi di Linguistica Italiana*, Il Mulino, Bologna, 1978.

Lepschy, Giulio. "Clitici veneziani", nel Holtus Gunter e Metzeltin, Michael (ed.) , *Linguistica e dialettologia veneta*, Tübingen, 1983.

Lepschy, Giulio. "Costruzioni impersonali con SE in veneziano" , nel Cortelazzo, M.(ed.), *Guida ai dialetti veneti*, vol.6, Cooperativa Libreria Editrice degli Studi dell'Università di Padova, Padova, 1984.

Marcato, Gianna. "Il lessico dialettale fra tradizione ed innovazione", nel Cortelazzo, M.(ed.), *Guida ai dialetti veneti*, vol.6, Cooperativa Libreria Editrice degli Studi dell' Università di Padova, Padova, 1984.

Marcato, Gianna. "Una grammatica dei dialetti veneti?", nel Cortelazzo, M.(ed.), *Guida ai dialetti veneti*, vol.8, Cooperativa Libreria Editrice degli Studi dell' Università di Padova, Padova, 1988.

Nalin, Giuseppe. *Fiabe veneziane*, Corbo e Fiore Editori, Venezia, 1995.

Nalin, Giuseppe. *Fiabe veneziane*, Libreria Filippi Editrice, Venezia, 1984.

Pellegrini, Giovan Battista. "Introduzione alla toponomastica", nel Cortelazzo, M.(ed.), *Guida ai dialetti veneti*, vol. 1, Cooperativa Libreria Editrice degli Studi dell'Università di Padova, Padova, 1979.

Piccio, Giuseppe. *Dizionario Veneziano - Italiano*, Libreria Emiliana Editrice, Venezia,1928.; Filippi Editore, Venezia, 1989.

Rohlfs, Gerhard. *Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti-Morfologia-*, A. Francke AG, Bern,

1949; Einaudi, Torino, 1968.
Salvi, Giampolo. "La frase semplice", nel Renzi, Lorenzo (ed.) *Grande grammatica Italiana di consultazione*, vol.1., il Mulino, Bologna, 1988.
Schmid, Stephan. "Tipi sillabici nei dialetti dell'Italia settentrionale", Ruffino, Giovanni (ed.), Atti del XXI congresso internazionale di linguistica e filologia romanza -Centro di studi filologici e linguistici siciliani Università di Palermo 18-24 settembre 1995, vol. 5, Niemeyer, Tübingen, 1998.
Skubic, Mitja. "Passato prossimo e passato remoto nei dialetti veneti", nel Cortelazzo, M.(ed.), *Guida ai dialetti veneti*, vol.8, Cooperativa Libreria Editrice degli Studi dell'Università di Padova, Padova, 1986.
Tagliavini, Carlo. *Le origini delle lingue neolatine*, Patron Editore, Milano, 1982.
Zamboni, Alberto. "La caratteristiche essenziali dei dialetti", nel Cortelazzo, M.(ed.),*Guida ai dialetti veneti*, vol. 1, Cooperativa Libreria Editrice degli Studi dell'Università di Padova, Padova, 1979.
Zolli, Paolo. "Il lessico dialettale e le difficoltà dell'etimologia", nel Cortelazzo, M.(ed.), *Guida ai dialetti veneti*, vol. 1, Cooperativa Libreria Editrice degli Studi dell'Università di Padova, Padova, 1979.